

学位論文審査の結果の要旨

1. 申請者氏名	妹尾佑介
2. 審査委員	主査：（岡山大学教授） 清田哲男 副主査：（上越教育大学教授） 松本健義 委員：（上越教育大学教授） 松尾大介 委員：（兵庫教育大学教授） 大西久 委員：（兵庫教育大学教授） 浅海真弓
3. 論文題目	美術の表現主題生成に影響する環境因子の研究
4. 審査結果の要旨	<p>教科教育実践学専攻芸術系教育連合講座 妹尾佑介氏 から申請のあった学位論文について、兵庫教育大学学位規則第16条に基づき、下記のとおり審査を行った。</p> <p>論文審査日時：令和7年2月11日（土） 10時00分～11時30分 場所：対面及びZOOMによるハイブリッド実施 対面での場所 岡山大学教育学部本館4階401教室</p> <p>1. 学位論文の構成と概要</p> <p>＜本論文の構成＞</p> <p>序章 研究の背景と概要</p> <p>第1節 研究の目的と動機／第2節 本論に関わる先行研究／第3節 本論の目的 第4節 本論の展望／第5節 本論の射程と対象／第6節 調査における倫理的配慮 第7節 本論の構成 各章における研究の内容</p> <p>第1章 美術教育における表現主題生成と創造性</p> <p>第1節 本章の目的／第2節 本論における表現主題の射程 第3節 表現を通じた学びに関する歴史の変遷および今日的教育課題の調査 第4節 表現主題生成と創造的な学びとの関係についての検討 第5節 創造的な「学び」の検討／第6節 フロントランナー型創造性を育む学習構造</p> <p>第2章 感受が表現主題生成に与える影響</p> <p>第1節 本章の目的／第2節 表現主題生成における言語と感受の関係／第3節 実践結果 第4節 生徒の表現傾向の分析／第5節 考察／第6節 本章の課題</p> <p>第3章 表現活動に沿って変化する表現主題</p> <p>第1節 本章の目的／第2節 表現主題の変化に関する先行研究の検討 第3節 研究手続き／第4節 実践概要／第5節 調査結果／第6節 事例の分析／ 第7節 因子に関する考察／第8節 表現主題の変化についての研究成果／ 第9節 本章における研究課題</p>

第4章 他者の表現活動が表現主題生成に与える影響

第1章 本章の目的／第2節 表現と他者に関する先行研究／

第3節 美術教育における他者との相互作用に関する先行研究／

第4節 調査Ⅰ：他者との関わりの中で生じる「新たな意味付け」の調査／

第5節 調査Ⅰの結果と分析／第6節 調査Ⅰについての考察／

第7節 調査Ⅰから浮上する新たな課題／

第8節 調査Ⅱ：意味付けの共有により新たな意味付けを行う実践調査／

第9節 総合考察／第10節 本章での研究課題／

第5章 作品への意味付けに他者が与える影響／

第1節 本章の目的／第2節 分析方法／第3節 量的分析／第4節 質的分析／

第5節 考察／第6節 研究成果と課題

第6章

第1節 本章の構成／

第2節 各章での成果に基づいたF型創造性と表現主題生成の関係／

第3節 フロントランナー型創造性を育成する表現主題生成の仕組み／

第4節 フロントランナー型創造性を育成する表現主題生成における課題／

第5節 本研究の今後の展望

<本論文の概要>

本論文は、高校生の芸術科美術の授業における生徒と環境との相互作用に着目し、表現主題生成に影響を与える環境因子を明らかにすることで、表現主題生成と創造的な学びの関係を考察し、主体的な学びを促す環境構成について考察することを目的としている。

美術の授業において生徒は、多様な外界の影響を受けながら表現する。その過程で生徒は、自分にとっての、あるいは生徒たちにとっての世界の意味を生成する。この意味生成の過程について、環境や、過去の経験を総合し、世界と新しい関係を構築する過程とも捉えている。その際に生徒に生じる表現しようとする意を、広く本論では表現主題と捉え、その生成の仕組みの一端を明らかにすることを目的に研究を進めた。

第1章では、先行研究を調査し、次の3つを検討している。

①先行研究を調査し、本論における表現主題の射程の検討と課題の明確化

②表現を通じた学びに関する歴史の変遷および今日的教育課題の調査、検討

③表現主題生成と創造的な学びとの関係についての検討

これらの検討と川喜田二郎、岡田猛らの創造性理論を基に、自ら新たな課題を設定し、その課題の達成を目指そうとする創造性を育む学習構造図である「フロントランナー型創造性モデル」（以下：「F型創造性モデル」）を構築した。F型創造性モデルでは、渾沌からの「関心」「出会い」を経て「知覚・習得・表現」の循環を行い、その過程で「省察」が起き、「発見」することで「新たな意味付け」を行い、その意味付けを他者と共有することで「価値」となり、自分の価値観が変容する「脱皮変容」に至る。この過程における心の動きと、表現主題生成の関係が明らかになれば、表現主題生成をより柔軟に捉えられると考えた。

そこで第2章から第5章では、後期中等教育段階における生徒が、美術の授業において表現主題を生成したり、変化させたりする過程を分析している。その結果、実際の生徒が制作する過程における多くの場面では、題材が提示された後においても、表現主題は生成され続け、変化し続けることが明らかになった。そして、教員が提示した題材への応答以外の文脈においても、表現主題生成が起きていることを確認している。

第2章では、感受が表現主題生成に与える影響を調査し、3つの傾向を明らかにしている。

- ①感受が多様な生徒は、色彩などの表現が多様になる傾向
- ②自己が価値づけているものからの感受が、生徒にとっての新たな表現を触発する傾向
- ③感受の違いを実感する経験を重ねることで、自己と他者の違いを受容する態度が表れやすくなる傾向

第3章では表現主題の変化に着目して調査を行った。その結果、表現主題は表現過程で変化し、その際に視覚に関連する語や擬態語が多く出現する傾向にあることが明らかにしている。加えて、次の3つの因子が、表現主題の変化に影響すると考えられると論じている。

- ①触れながら表現主題に適した材料を選択する相互行為
- ②友達や教師の共感的な関わりの中で、他者に表現主題を説明する相互行為
- ③他者から過去に評価された技法や材料を再活用する相互行為

第4章では、他者の表現活動が個人の表現主題生成に与える影響について調査している。調査の結果、他者と意見が相違する状況など、生徒にとって困難な状況が生じた場合、友達の判断や社会的価値などに委ね、自ら表現主題を変更する事例が紹介している。一方、造形を介して違いを受け入れようとする雰囲気のあるグループは、意見の違いを基に、自らが想定していなかった新しい価値へと向かう姿について述べている。

第5章では、自分の作品に対する他者の価値付けが、創造活動に与える影響について調査している。その結果、次の3つの傾向が明らかにしている。

- ①他者の感じ方を知り、自己の作品を意味付ける過程で、他者から影響を受けている実感が高まる傾向
- ②意味付けを新たに創造しようとする学習態度と、意味付けを他者に伝えようとする学習態度が存在し、学習環境に応じて度合いが変化する傾向
- ③意味付けの検討を重ねている生徒は、他者の言葉により意味付けが拡張しやすい傾向

第6章では、第2章から第5章までの成果を基に、表現主題生成に影響する環境因子について、総合的に考察をし、本論の結論を述べている。

結論として、美術の表現主題生成に影響を与える環境因子は、「身体」「他者との関わり」「作品や表現行為の痕跡」の大きく3つの枠組みで整理されることを明らかにし、枠組みごとに、次の因子を提示している。まず、「身体」の枠組みにおいては、「身体を契機とした『知覚・習得・表現』の連続した循環」、「『内的リアリティ』を伴う感受」、「感受した経験の想起」が、因子として考えられ、「他者との関わり」の枠組みにおいては、「他者に対する模倣」、「共感的な他者との交流の際に生じた言語表現」、「他者の表現主題を理解しようとする態度」が、因子として考えられる。そして、「作品や表現行為の痕跡」の枠組みにおいては、「過去の制作活動の想起」と「自分の作品に対する他者からの価値付け」が、現時点では因子として考えられることを述べた。これらは、題材により生じる表現主題とも相互作用しながら、生徒なりのイメージを創造していく。この過程が環境因子の影響を受けながら生成される表現主題であると結論付けている。

また、本論の成果が、生徒が学びに向かう多様な学習場面の分析や、生徒の自己省察ツールとしての応用などに展開し、発展していく可能性についても明らかにしている。そして、これまでの研究では、表現主題を制作の最初に固定することが自明だった美術教育の研究に対して、表現主題の変容が、環境因子によって生じることを述べたことが、本研究の新規性であり成果である。

2. 審査経過

本論文の主要部分は、6編の全国学会誌の査読付き学術論文から成っている。大学美術教育学会誌『美術教育学研究』（単著、第53号、2021年、および第56号、2024年）、兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科『教育実践学論集』（単著、第24号、2023年）、美術科教育学会誌『美

術教育学』（単著，第44号，2023年，および第45号，2024年，および第46号，2025年3月掲載予定）である。これらの研究成果を基に，博士論文を纏めている。以上の成果と内容について，5名の審査委員が討議した観点は，以下の通りである。

（1）研究の目的と論文構成との整合性について

本研究では，今日の高校生が，美術の授業における相互行為に着目し，表現主題を生成する際に影響を与える環境因子について明らかにすることを目的としている。そして，本研究では，美術の授業における高校生の実態に基づいて検証を行うために，第1章で理論的な考察を行った上で，第2章から第5章までの各章で論じる四つの調査を実施し，分析結果を考察している。

第1章では，本研究の基盤となる表現主題生成の概念について，創造性研究をはじめとした理論研究の先行文献を基に検討し，本研究の視座の軸となる「フロントランナー型学習構造モデル」を構築した。このモデルを手掛かりとして，第2章から第5章では，美術の授業における表現主題生成場面の調査，分析を行っている。終章では，各章での調査結果を再度俯瞰し，本研究の結論として纏めている。相互行為の中で表現主題を生成することは，美術の授業において自ら課題を設定し，主体的に学ぶために不可欠である。本研究は，高校生を対象として，生徒の表現主題生成場面に着目した相互行為を精緻に分析している。そして，それらの知見を総合し，美術の表現主題生成に影響を与える環境因子を明らかにしている点において評価できる。

（2）研究の独創性について

本研究では，大きく2点の独創性を有していると考えられる。

まず，後期中等教育段階の生徒を対象として，相互行為に着目をして表現主題生成過程を精緻に分析した点である。この研究により，これまで表現主題を制作の最初に固定することが自明だった美術教育の研究に対して，表現主題の変容が，環境因子との相互行為によって生じることを明らかにした点である。この点において美術科教育学会で高く評価され，同学会誌『美術教育学』第44号に投稿した論文「表現活動に沿った表現主題の変化に影響する因子に関する一考察：言語化された表現主題の変化と生徒と環境との相互行為に着目した分析を通して」では，第21回『美術教育学賞』を受賞している。

次に，美術教育研究と創造性研究の理論に基づいた学習構造をモデル化した上で，モデルを活用しながら実践研究を展開した点である。表現主題や創造性に関する多くの先行研究を整理した上で，「フロントランナー型学習構造モデル」を構築し，本研究における視座を明確に示している。これらは，本研究の独自性であると捉えることができる。

（3）今後の発展性について

本研究では，後期中等教育段階の表現主題生成の過程を分析するための新たな視座を提示しているが，今後の研究課題として，それらの知見を基に，幼児期から成人に至るまでの幅広い学びを分析できる可能性について言及おり，今後の研究の発展が期待できる。また，生徒が自ら学習を省察するためのツールとして，本研究の知見を応用するなど，より実践的な活用の提言も行っている。博士課程での研究を基礎としながら，外界との相互行為に着目して子どもたちが自ら主体的に美術の学びに向かう態度を育む実践研究に向けて，理論と実践の往還によるさらなる研究を深めていこうとしており，本研究における今後の発展性について期待できる。

（4）学校教育の実践への貢献について

本研究は，理論研究をふまえた上で，自身の高等学校における教育実践を対象として研究を展開しており，美術の表現主題生成に関わる実践的な内容について詳細に論じている。特に，第2

章から第5章の調査では、生徒が表現主題生成を行う場面を、混合研究法に基づき量的、質的に精緻に分析している。また、各章の成果に基づき、第6章における総合考察では、外界との相互行為の中で、表現主題の生成することを促す学習環境設定について具体的な提言を伴いながら論を展開している。これらの成果は、学校教育の実践への貢献に寄与するものであると言える。

3. 審査結果

以上により、本審査委員会は 妹尾佑介 の提出した学位論文が博士（学校教育学）の学位を授与するにふさわしい内容であると判断し、全員一致で合格と判定した。